

## 「空前の大事業

### 上水道敷設 〈後編〉

大正3年7月に第5代市長となった山本徳次郎市長は、上水道実現を悲願とした有川貞寿市長時代の助役であり、桜島大爆発ショックがやや収まると、早速、上水道敷設の目標を復活させ、国庫補助と起債の件について国との交渉を再開した。

同4年2月18日、国から県知事あてに「鹿児島市上水道国庫補助費は先に官報をもって公布された年額のとおり契約すべき」旨の通達が届いた。国庫補助は総額で14万7千円、年額割当として、同3年度分が1万円となっていた。これを知った市長は、具体的な工事設計と許可申請を急がなければ、同4年3月末をもってこの国庫補助は失効しかねないと判断。総工費は64万2千6百円で、国庫補助、県費補助を除く市負担額は46万6千5百円、うち、35万円は市債によるものとする計画書を作成し、同年3月6日に緊急市会（臨時会）を招集し提案した。市長は、「現在、市の人口は約7万3400人であるが、この上水道は、およそ20年後の市の総人口が10万人に達すること

を見込んでの計画である」と説明。市会は満場一致での議決となった。

（大正4年の市の当初予算は、約33万円であり、上水道の事業費予算規模は、その約2倍であった。）

国からの許可が市に届いた後、配水用地の「上之原峰ヶ迫」で起工式が行われたのは同4年9月18日だった。

起工式から4年後の同8年11月には上水道の一部が完成し、411戸（2千359人）への給水が開始された。給水開始に先立つ同年9月には、水道課が新設され、上水道敷設工事は本格的な仕上げの段階に入った。

しかし、この間、第一次世界大戦の影響で資材不足が深刻化。また、諸資材の価格が暴騰したため工事が進まない時代が続いた。

そして、総事業費約130万円を投じた末に、同11年にようやく完成した。



大正6年に市役所構内に造られた水道事務所